岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要　第3号（1993）pp. 257－263

■資料■

良い授業のための法則

村上　祐，駒林邦男　訳・編*

（1992年12月11日受理）

Tasuku Murakami and Kunio Komabayashi

Laws of Good Teaching

以下は，" Journal of Chemical Education "，Vol．9，No．5，1990．の「挑発的な提言」（〔provocative opinion]）の欄に掲載されたH.C.Friedmann 教授（シカゴ大学，生化学・分子生物学科）の

"Fifty-Six Laws of Good Teaching"

の翻訳，および岩手大学教育学部・人文社会科学部学生が作った「良い授業のための法則」である。

Friedmann の「提言」は極めて示唆に富むものであると同時に，諧謔・逆説・アイロニーをまじえた「挑発的」なものである。この「提言」は，最初，村上によって抄訳され，『鬼胡桃』（岩大教職員組合教育分会機関誌），No．68，1991．に掲載された。駒林は，この訳を下敷きにして完訳した。この試訳を村上が校閲した。訳出にあたって，本学部教官の橋本二郎氏の教示をいただいた。

Friedmann の "Laws of Good Teaching " は56の法則であった。駒林は，「法則」をラウンドナンバーの60法則にするように，学生諸君に「法則」を作らせた。それが，「学生が作った，良い授業のための60法則」である。

人文社会科学部の「教育課程・方法」受講学生（84人），教育学部の「教育方法」受講学生（108人）に，Friedmann の「56法則」の翻訳を配付し，若干の説明を加えた上で，次のインストラクションをあたえた。「この56法則は，大学教員のための法則です。ラウンドナンバー60の法則にするために，四つ以内の法則を，学生の立場から作って下さい。来週，集めます。宿題ではありません。出したい人だけが出してくれればよいです。」

提出者は，人文社会科学部の39人（延べ，125法則），教育学部学生が37人（延べ，98法則）であった。

学生諸君が作った延べ223の「法則」の中から，代表的なものを取り上げた。語句，文体には駒林が大幅に手をいれた。学生が作った「法則」の枠内で補足したところもある。

＊岩手大学教育学部理科，同教育学科

良い授業のための56法則
(H.C.Friedmann)

1．良い教科書を選べ。だが，講義では教科書に追随するな。
2．講義内容を予め組織だったものにしておけ。だが，講義のときには，この組織立ての虜になるな。
3．講義の主題を常に吟味せよ。そうすれば，主題はいつまでもフレッシュで，生き生きしたものであり続けようし，自ずと内から流れ出てくるだろう。
4．自ずと内から流れ出てくるように講義をせよ。しかし，自分の知識だけからの即席講義であってはならぬ。
5．いつも時間通りに始め，時間通りに終われ。
6．毎時間，その時間の講義内容のアウトラインで開始せよ。学生にとって，頭がいっそう混乱するのは，言葉の蓄えがないことであるよりも，何を教えられるか期待できないという状態である。
7．あなた自身でも学べないし学べなったこと，また，わからないし，わからなかったことを学生に学ばせよう，わからせようとしても無理だ。
8．あなたの知識が講義内容をはるかに超えているのでなければ，講義をすべきではない。
9．細かいことに注意を払うことで大局的把握の欠如を補償できるなどと，思ってはならぬ。
10. 自分の博識をひけらかし，学生を圧倒するな。学生は，自分たちが学んでいることを超えた，教師がひけらかす知識に興味を持つことはないのだ。
11. 学生よりももっと知っているからといって，自慢してはならぬ。教師より遅れて生まれてきたのは，何も彼らが選んだことではない。
12. 知っていないことは知っていないと言え。しかし，自分だけが知っていないのか，それとも誰も知っていないのかをハッキリ言えれば十分だということは，知っていなくてはならぬ。
13. 学生の無識，すなわち知識の欠落を頭の鈍さと一緒にするな。
14. 講義内容を暗記するのではなく，講義の素材を理解するだけで良い。
15. ノートに頼って講義するな。ただし，思い出すのが難しい数値は別。
16. テキストなどの印刷物を読み上げて講義を決してするな。もし学生が文盲であったとしたら，あなたの課程は選択しないだろう。
17. メモや粗筋は手元に置け。だが，使ってはいけない。優れた役者に黒子のプロンプターは要らない。
18. ＯＨＰの使用を避けよ。間違いがゼロで退屈な講義よりも，間違いがあっても内から自ずと流れ出てくるような講義の方が良い。講義と研究ゼミとは違う。
19. 単調な話し方は避けよ。学生の注意が講義の主題から離れ，教師の声に向けられてしまうに違いないからだ。
20. 性急でない口調で講義せよ。早口は学生の頭を混乱させる。一方，ご神託のような話し方は学生を退屈させる。
21. ある単語・アイデアをただの一回使っただけで，学生はこれらのものに”感光”する

などと夢にも考えるな。考えさせ，理解させるのに必要なことは通告ではない。中身のある証明・説明である。

22. 同じ講義内容を二度するな。学生がついてきているかどうかを知るために，彼らの方を見て講義せよ。

23. 講義することと演技することの差異は次の点にある。前者の場合，主題が最初に来て筋書きは後から来る。後者では筋書きが最初に来て，主題は後からついて来る。

24. 質問にはベストを尽くして答えよ。質問した学生一人だけの疑問だということはほとんどないからだ。質問は講義の妨害ではないと心得よ。質問とは，質問から得た答えを授業の残りの部分へ送りむためのチャレンジなのだ。

25. 学生諸君は，試験にパスするためだけでなく心から学びたがっている，という仮定で講義せよ。

26. 試験を，授業の生きた一部分とした活用せよ。ある特定の課程の学習への学生のアプローチは，基本的には，学生が予想する試験問題のタイプによって設定されるのだから。

27. 学ぶことを学生に求めていない範囲のトピックから，出題してはならぬ。

28. あるトピックの学習に対して"責任を持て"と学生に言ってはならぬ。責任を学生に課すならば，学習は自分が自分自身に課した義務というよりもむしろ，他人から負わされた義務が如きものとみなされてしまうだろう。従順さと自尊感情の間に引かれている線はかぼそい。しかし，それは明確な線だ。

29. 教師の有能さが，学生からのうけの良さ（人気）を常に凌駕しなくてはならぬ。

30. 学生のすぐれた達成は，いつでも褒めよ。失敗を罵るな。

31. 冗談のための冗談を言うのをやめよ。言うのなら，教えていることに役立つ冗談だけ言え。

32. 決して学生を笑ってはいけない。笑うなら学生と一緒に笑え。

33. 学生にからかわれたくないのなら，学生をからかうな。

34. 学生があなたに真面目に接するように，学生にいつも真面目に接しなさい。

35. 教えるということを余り深刻に考えるな。自分が話していることに学生が興味を持つなどということは，まず無いと思ってよいのだ。

36. クラスの前でカンシャクを起こしてはならぬ。学生はあなたの私的な感情には関係ナイ。

37. 学生を尊敬せよ。そうすれば，学生はあなたを尊敬するだろう。また，学生を丁重に扱いなさい。なぜなら，学生が丁重さと甘やかしを混同しなくなるだろうから。

38. 学生に関して，親密さと尊敬の欠如とを，また，意見の不一致と個人的嫌悪とを混同するな。

39. 学生の方を見て講義せよ。天井や床はあなたの講義を聞いていない。黒板も同じだ。

40. 学生は自分の講義しか聞いていないなどと，夢にも考えるな。

41. 学生が眠っていたとしても，退屈しているとか講義に興味を持っていないからだと思ってはならぬ。ほかの課程のレポートを徹夜で仕上げていたのかも知れない。

42. 学生が黙っているからといって，理解しているなどと思いこんではならぬ。混乱しているかもしれない。

43. 始めは速く，終わりはゆっくりといったテンポで講義をするな。このような話し方は，

講義のネタを使い尽くしてしまったことを示す。

44. 始めはゆっくり，終わりは速く ── このようなやり方は，学生を疲れさせる。

45. どの学問分野でも，その分野特有の言語体系を持っている。良い講義は片言隻句ではなく，その言語体系を教える。

46. 新しい専門用語・概念は，板書したり，学生が書き取れるように繰り返して言うことによって強調せよ。だが，絶対に，すべてのセンテンスを繰り返してはならぬ。テープレコーダのような逐語的反復は，講義時間を半分にしてしまうだけだ。

47. 講義をすることと書き取らせること（ディクテーション）とを混同するな。前者は創造的な過程であり，学生によって能動的に受容され，働きかけられる過程である。後者は機械的な稽古であり，後になって理解するために予め記録しておくだけの過程である。

48. 瑣末なことになってしまう程単純化するな。また，曖昧模糊たることになってしまう程複雑化するな。明晰な講義は必ずしも単純なことを要しない。奥行きの深い講義は不明瞭であることを要しない。

49. あなたの授業は重要だとの確信をもって振るまえ。たとえ，この信念は証明し難いものであるとしても。

50. 弾んだ気分，やり切ったという気分なしで講義を終わらないように。そうした気分が起こらなかった講義は，多分，素晴らしい講義ではない。

51. 知力は学習の量以上に，その質によって測られる。

52. 学生は無限の学習受容能力を持っているなどと期待してはならない。頭脳の飽和限界は，知力以上に生理学によって決まる（知力は，生理学的与件，つまり頭脳の制約条件の枠内で成果を最大化する能力である）。

53. 知識の無さから生じた独創性を嘲るな。

54. 教えるということの最大の挑戦は，学生の知識が成長した後でも，知的興奮を醒めさせることなく持続させることである。優れた教師は，多くの情報をものともしない創造性を育てる。

55. あなたが学生に単位を与えてやっているのではない。学生が単位を稼いだのだ。

56. 良い講義と良い試験，良い試験と良い評定を混同するな（講義することは一つのことであり，試験することは別のことである。成績をつけて評定することは，もう一つの別のことである。優れた教師は，これ三つのことをマスターしているに違いない）。

岩大学生が作った，良い授業のための60法則

（1）「簡単なことを難しく話すな。難しいことを難しく話すな。」

（2）「《浅い思想，難しい言葉》ではなく，《深い思想，やさしい言葉》で語れ。」

（3）「講義から自然に流れでる余談はあなたの講義に潤いとふくらみをあたえ，学生には息ぬきの時をあたえる。」

（4）「知的興奮こそ学びの泉だ。未知なる世界に挑むときの心の躍動が学びの推進力である。あなたは芸人ではない。語り口だけで学生の興味を引こうとするのは無理だし，邪道である。」

（5）「学生に疑問を持たせ　一緒に解決せよ。良い講義とは，学生が自分から進んで問

題を発見し，それを解決していく歓びを体験するきっかけとなるような講義である。」

(6)「休講は前もって知らせよ。やむを得ず当日休講した場合，学生に謝罪せよ。」

(7)「あなたが忘れた物を，学生にとりに行かせるな。」

(8)「使用しない教科書なら，買わせるな。」

(9)「講義中，もし眠っている学生がいたら自分の講義をかえりみよ。あなたが学生を眠らせているのかもしれない。」

(10)「いやいや講義をするな。その，やる気のなさが学生にも伝染する。」

(11)「教えるだけで満足するな。学生に理解されてから満足せよ。」

(12)「一方的にしゃべりまくる授業を止めよ。学生，教師，両方が疲れる。」

(13)「テストの結果が悪かったら，教え方が悪かったと思え。」

(14)「試験の成績が良い学生だからと言って，彼が講義内容を理解していると思い込んではならぬ。大学受験で鍛えた《傾向と対策》の成果であるかもしれないのだ。」

(15)「学生の出欠で心を悩ますな。学生は多忙で疲れている。」

(16)「板書するなら解読不能な文字を書くな。後ろからでも読める大きい字を書け。」

(17)「出欠を確認せよ。学生はなにかとさぼりたがるものである。」

(18)「授業中，教室に鍵をかけてはいけない。」

(19)「高校の延長のような授業はするな。宿題を出したり，挙手をさせたりするな。指名するな。遅刻厳禁は良くない。」

(20)「学生と共同して授業を作り上げていくよう，努力せよ。」

(21)「出来，不出来による差別はするな。出来る学生だけとの一対一の授業はするな。」

(22)「学生に信頼される教師になるよう心掛けよ。教師が好きだと，その科目も好きになる。」

(23)「自分の知識を伝えることと，それをひけらかすことを峻別せよ。学生は，あなたが予想する以上にその差を見抜いている。」

(24)「私的な自慢話だけで貴重な時間を浪費してはならない。学生は，あなたの家族や人脈を知るために授業料を払っているのではない。」

(25)「活発な学生は教師にとって好都合であるかもしれぬ。しかし，黙っている学生が無関心，無気力であると決して考えるな。学生は壁ではない。」

(26)「生徒が講義を途中退席しても，怒ってはいけません。あなたの講義に対する意思表明であるかもしれない。」

(27)「自分の教え方を常に反省せよ。学生はあなたの講義を，あたたが考える以上に批評している。」

(28)「学生には，あなたの評価の仕方を説明しておけ。そうすれば，自分の成績に納得するようになるかもしれない。学生は，自分の答案やレポートが，あなたにどのように評価されたのかを知りたがっている。」

(29)「講義とは直接関係のないレポートを，課題にするな。」

(30)「講義の中で，あなた自身の体験や身近な事例を引け。そうすれば，学生はあなたの講義をいっそう関心をもって聴くだろう。」

(31)「講義中できるだけ学生に質問せよ。そうすれば，講義内容はあなたと学生の共有物となる。」

(32)「遅刻は，決してゆるすな。」

(33)「学生がおしゃべりしていても，簡単に叱るな。講義に関することを話し合っているのかもしれない。」

(34)「あなた自身も，講義内容の予習・復習を十分になすべきである。」

(35)「研究者であっても，教室に入ったら教師になれ。」

(36)「課題を出したら必ず提出させ，発表させなさい。課題をやってこない学生ばかりではない。」

(37)「一人ひとりの学生の知識が同じだなどと，夢にも思ってはならぬ。至難な業だが，知識の多いものにも，少ないものにも，飽きない授業を心掛けよう。」

(38)「講義にはベストの体調でのぞめ。日頃の健康管理はもちろんのこと，二日酔いなどもっての他である。」

(39)「学ぶ歓びを学生が体験できるよう心掛けよ。あなたは人間であって，ティーチング・マシンではない。」

(40)「講義を聞いている大勢の学生の中に，あなたを尊敬し，慕っている学生が一人はいると思え。学生を愛することが学生に愛される第1歩である。」

(41)「学生を見下すな。教えてやっているのではない。教えることはあなたの仕事，義務である。」

(42)「聞こえるように発声しなさい。どんなに良い講義でも，聞こえなければ学生の《耳に念仏》となる。」

(43)「やたらと外国語を振り回すな。学生に意味がわからないなら，あなたの言っていることはそれこそ，ナンセンスなものになってしまおう。」

(44)「専門用語ばかり使うな。あなたの相手の学生は専門家でない。」

(45)「一人の学生が理解できないでいると知ったら，あと30人の学生が理解できないでいると思え。」

(46)「学生に私語をさせてはならない。かと言って，考え合うための私語まで制限すべきではない。」

(47)「学生は予習してくるなどと過大期待してはならぬ。am.8:40 ～pm.6:00 まで授業を聞いている学生だっているのだ。」

(48)「良い教師・悪い教師を仕切る境界と単位を取りやすい・取りにくいの境界とが合致しているなどと誤認している学生もいる。かれらに妥協することは，あなたの堕落である。」

(49)「授業の進度ぐらいは覚えておきなさい。授業の始めに，学生に尋ねるな。研究に熱中していると思う学生は少なく，授業に不真面目と思う学生が多いからだ。」

(50)「自分の担当時間には授業をすること。学生が呼びにくるのを待っていてはならない。まして，呼びにこなかったからといって，学生を叱ってはならない。」

(51)「あなたの学生時代を忘れてはならぬ。ただし，それと今の学生を比較してはならない。」

(52)「講義の中身で自信がないなら，出欠を厳しく取れ。」

(53)「欠席者に対する非難を，出席者にするな。」
(54)「板書は教師のメモがわりではない。学生にわかるように書け。」
(55)「値が張る教科書を指定するな。指定したら使用せよ。」
(56)「講義内容は低級なのに高度の答案を求めるのは，誤りである。」
(57)「あなたが熱弁を振るうのは勝手である。だが，熱弁すれば聞いてくれるほど，今の学生は甘くないと心得よ。」
(58)「毎年，同じ講義をするな。学生は，先輩のノートと《過去問》には敏感である。」
(59)「”質問，ありますか？”と質問するな。学生は質問がないのではなくて，大人数の中で手を挙げるのを恥ずかしいと思っているのだ。」
(60)「教科書を読めばすぐにわかるような講義はするな。教科書を読んでもわからないような講義はするな。」